

## 留学のすゝめ

25年前、地元の公立高校に入学して数か月。保育園から小学校、中学校とずっと同じ進路を歩んで来た友人に夏休みに海外留学に行かないかと誘われ、20日間の語学留学を経験しました。それから4年後の大学2年次には小学校から続けて来たラグビーをする為、約1週間。2回ともニュージーランド（NZ）に留学に行きました。友達から誘われただけで自主性があった訳ではなく、今思えば決して気軽に良いよと言えるような費用ではなかったにも関わらず、2回も親の脛をかじり経験させてもらったことに、本当に感謝している。そして、この留学こそが、田舎で只々毎日能天気にお過ごしてきた私の人生の転換期になったことは間違いないと断言できる。

1度目の留学。私が通っていた倉吉東高校からは友人と私ともう一人同級生の女の子。その他は鳥取県下の高校生が総勢50名ほど。私たちは1年生でしたが、他校の生徒は2年生3年生も多くいました。初めての海外、ましてや初めての飛行機。初めての事ばかりでした。高校1年生の夏なので、中学校英語しか学んでいません。英検で言うと3級レベル。実はとっても小心者で、緊張症の私ですが、他人からは物怖じしない性格と言われたりします。いつも落ち着いてるね、なんて言われることもあるけど、ただ単にのんびりしているだけなんです。そん

な性格ですが、意外と初めてのことにそれほど抵抗なく取り組めるのはこの時の経験があったからかも知れません。中学校レベルの英語で初めてのホームステイ。初めて会う NZ のホストファミリー（ストーブ一家）、ストーブ夫妻と同級生の息子（ブレンドン）、3歳ほど下の妹（メラニエ）、5歳ほど下の妹（エイシェリー）の5人家族でした。海外ドラマの出てくるような家族で、家も想像通り。大きな庭できれいに整備された芝、一見平屋のように見えるけど地下1階がある不思議（初体験）な住居、大きなトランポリンが庭においてありました。ここから毎日通ったテムズ・ジュニアハイスクール。学校へ行くと、他国の留学生もいました。そこで出会ったドイツ人留学生のグンダ・ハクバース（女性）とも何故か仲良くなれました。NZの学校には白人の生徒はもちろん、マオリ系の血を引く生徒、ポリネシアやメラネシア（サモア・トンガ・フィジー等）の生徒、もちろんアジア系の留学生もいて、多様性に富んだ環境でした。また、ラグビーをしていたことが功を奏して、休憩時間や授業と授業の間隙間時間もいつもタッチ・ラグビーに誘ってくれました。それもあってか、すぐに溶け込むことが出来ました。また、夏に南半球に行ったせいか、NZの冬は私にとってはとても寒く、毎日5〜6枚の服を着込んでいました。NZの学生たちは何故か半ズボンにトレーナー姿。毎日「How many?（何枚服を着てるの?）」と会うたびに何度も、着ぶくれしている私を面白がって話しかけてくる子もいました。みんな基本的

には外国人特有のフレンドリー感がありましたが、旧友のように接してくれたことで、ホームシックに罹ることもありませんでした。週末には家族でロトルアという温泉地に連れて行ってもらったり、ラグビーの試合を見に連れて行ってもらったりと本当に充実した夏休みになりました。

はじめての留学では、まず海外で生活することの楽しさを学びました。中学英語であっても、語順を意識して簡素な表現で、意思を伝えることが出来たことで英語が好きになり大学進学については知識もなく、意識すらしていなかった高校1年生の私に、その後大阪外国語大学と言う進路を選択する大きなきっかけとなりました。そして、多様性を理解し受け入れる大切さを学ぶことが出来ました。教科書で学ぶ、人種差別。前職・三省堂の中学校英語教科書のリーディング教材にもなっている、キング牧師のスピーチ。南アフリカの人種隔離政策（アパルトヘイト）。日本国内における部落解放運動。外の世界に出てみると、アジア系の黄色人種である自分がどのように見られているのかと感ずることがありました。多様性を排除することから、差別的な思想に偏っていく傾向があると学び、それを受け入れることの大切さを痛感しました。日本の片田舎（鳥取県）に居ては経験出来ない、貴重な体験を文字通り肌で感ずることが出来ました。

2回目の留学は、大学2年生の同じく夏にラグビーを主な目的に再び NZ へ行きました。1回目は北島のオークランド近郊のテムズという町でしたが、2回

目は南島のクライストチャーチに約1週間行きました。20歳になっていたこともあり、アルコールを楽しんだり、カジノを経験することも出来ました。ラグビーは一度試合を行うと、かなり体力を消耗するスポーツなので、1週間のうち練習は毎日のようにしたと記憶していますが、試合は2試合ほどだったと思います。その間の時間はクライストチャーチの街を観光したり、庁舎に表敬訪問に行ったりしていました。一緒に行ったチームのメンバーは地元鳥取県倉吉市の社会人チーム。出身高校のOBの方が多く、私も同級生2人と参加しました。同級生2人は高校3年間、一緒に花園を目指して切磋琢磨した仲間ですし、よくよく思い出してみると、小学生のラグビースクール時代も共に泥まみれになった旧友です。別々の大学に進学した後、再び同じチームでプレー出来たことは、今思えばとても感慨深いです。

2度目の留学は期間も1週間と短く、現地の人たちとの交流はそれほど多くはなく、同じチームの人たちと過ごす時間がほとんどでした。その分、本来の目的であったラグビーに集中出来ました。世界ランキング1位のラグビー強豪国の国民がどうラグビーに向き合っているかを学ぶことが出来ました。日本の人口は約1億2千万。NZの人口は約480万。一方ラグビーの競技人口（選手だけではなく、ラグビー関係者も含む）は日本が29万。NZが15万。競技人口では日本の方が多く、数の論理からすれば優秀な選手が多く日本にいて強いチ

ームを作れそうですが、世界ランキング1位とは単なる数の論理では表せない、ラグビーに関わる選手1人1人の情熱や国民全体の意識から形成される、強くて当然と思ってしまう独特かつごく自然な雰囲気がありました。旧来型の所謂護送船団方式と言われていたような、右に倣えの数の論理で成長してきた今までの日本社会から、人口減少社会へと対応出来るよう生産性・内容に重きを置いた社会構造の変化に対応していくヒントになると思います。そして、今回の主な目的はラグビーだったこともあり、勝負に対する向き合い方も学んだように感じます。勝負は読んで字のごとく、勝ちと負け。チームスポーツであれば勝つチームがあれば、負けるチームがある。でも、どのチームも勝ために日々真剣に努力し、試合当日は体力の限界に挑戦し、恐怖心に打ち勝ち、相手をねじ伏せようとする。にも関わらず、結果必ず勝ち負けが付いてしまう。みんな勝ちたい。でもいつも勝てる訳ではない。ごくごく当たり前のことではあるが、勝つための努力を必死にしてきて、報われなかった時の気持ちの整理はそう簡単ではない。でも、明日は来る。この絶対的真理にどう立ち向かい、どう受け入れるかは、私がその後大学4年時に母校体育会ラグビー部のキャプテンを任された時に嫌と言うほど味わうこととなりました。

今回のテーマは『留学のすゝめ』ですが、私にとってこの2回の留学、海外経験は人生にとっての宝物です。2018年ごろ経団連会長・中西宏明氏（日立製

作所) が新卒採用者に対して求める資質に『語学とリベラルアーツ』と言っていました。今後ますます加速していくグローバル経済社会にとって、諸課題の解を海外に求める機会は増えていく中、英語に限らずやはり語学に強いということは、停滞している日本社会から一歩前に進んで行くための武器になることは間違いなさそうです。そして、リベラルアーツ（一般教養）は多様性を理解し受け入れるためには必ず必要な要素だと思います。単一民族国家の単一な思考、村社会的な考え方は既に日本には存在しないと自覚する必要があると思います。そして、生きていれば負けることも多く、自分の思い通りにいかないことも思った以上に多い。でもそれを受け入れて強く生きていく。そんなこんなを海を渡ることで身に着けられると思うので、私は子どもにも留学という選択肢も進めています。

実際将来の留学資金になればと、数年前から毎週水曜日に米ドル・豪ドル・NZドル・英ポンドを1000円ずつ積み立てています。いつか、4人の子どもたちが留学に行く時に活用しようと思います。もちろんそれぞれの意志が大切なので、行かなければ海外旅行の資金になるかなあ〜と夫婦で決めています。

S L 2 3 0 2 - 3 2 2 0 - 2 5 8 1

ソニー生命保険(株) 大分支社

〒 870-0029 大分市高砂町 2-50

オアシスひろば 21 9 階

TEL 097-532-9200

ライフプランナー 山田新悟